感情のコントロールを目的としたSSTグループに参加した母親の養育態度の変化

櫻庭京子[1]　峯松信明[2]　作田亮一[1]　今泉敏[3]　堤剛[4]
([1]獨協医科大学越谷病院　[2]東京大学大学院　[3]県立広島大学　[4]埼玉医科大学)

（はじめに）当院では広汎性発達障害者を対象に、感情のコントロールを目的としたSSTグループ訓練を独自のDQプログラムを用いて実施している。同プログラムは年齢や発達段階に応じて可変性があるので、対象年齢は幼稚園年中児（4歳）から高校生までと幅広いが、どの年齢においても母親の見学参加を義務付けている。感情のコントロールが難しい子供は、キレやすいという生来の気質だけでなく、母親の態度や周囲の環境が及ぼす影響は大きいと考えるからである。母親が自らの態度を内省し、子供と一緒に感情をコントロールすることを学ぶことによって、子供の感情のコントロール能力も向上すると考えた。本発表では、同プログラム実施後、母親ミーティングにおける母親のコメントを抽出し、実施後～２か月と６ヶ月以降で比較検討し、その結果を考察した。

（方　法）6~10名の発達段階が同じ子供を１グループとし、月１回DQプログラムを実施した。DQプログラムの構成は、母親からの困ったエピソードを紙芝居にまとめたものを子供たちに提示し、その後、どんなことができるか、問題の解決方法を子供に提案させるものである。出てきた解決策を吟味するために、自分や相手の気持ちを考え、一番フェアな解決法は何かを考えていく。プログラム実施中は、母親は背後で見学してもらう。プログラム実施中、セラピストが心掛けていることは、子供の意見の正否を判定しないこと、どんな意見も決して否定しないこと、である。プログラム実施後、子供たちは自由遊び、母親はセラピストとミーティングを行う。ミーティングでは、母親にプログラム中の子供の様子に関するコメントや子供の近況報告を行ってもらう。その後、セラピストは母親にプログラムの意図（子供の考える力を伸ばし、就労に結び付けることが目的等）を説明する。

（結果と考察）プログラム実施後の母親ミーティングで、実施後～２か月と６か月以降でみられた母親のコメントを以下にまとめた。

表１　母親ミーティングにおける母親のコメントの変化

実施後～２ヶ月	６ヶ月以降
○子供の療育中の態度への不満 「ふざけている」 母親には、療育＝お勉強のイメージの先入観があるため、道徳の療育中に子供が楽しくはしゃぐのは許せない 「なぜ、手を挙げて発表できないの。わかっているのに」 教育の内申点重視の影響で、発表するということに関して母親が強迫的になっている。 **○セラピストやプログラムへの非難** 「内容が難しい。うちの子はわかっていない。だから発表できない」 「なぜ正解を教えないのか」	**○自省** 「自分も怒りのコントロールができていないことに気付かされた」 「自分も若い頃にこんな考え方を知っていれば、もっと違った人生を送っていたと思う」 **○許容** 「これ（特に妙な言動）も、この子なのかなあ」 **○信頼** 母親が何でも指示し、やってあげるのではなく、「自分で先生に言いなさい」「自分で考えなさい」と子供に任せることができるようになった。また、子供が考えてやった結果に関して、否定的なコメントをしなくなった。

プログラム実施当初、母親は子供の行動をなんとか改善しようと型にはめ、プログラムに対して懐疑的であったのが、プログラムの意図を理解してくると、自己を内省し、型からはずれた子供の特性を受け止め、信頼に変わっていくことがわかった。この現象は全ての母親にみられるわけではなく、プログラム途中で辞めていく母親も少なからずいた。今回の発表では子供の変化に関しては述べてないが、母親の変化に伴い、子供の行動にも変化がみられた。